

## 劉長卿から白居易へ

——詩語「隱吏」を手掛かりとして——

### 一、序

劉長卿は天寶の終りから貞元年間の初めまで活動した詩人である。進士登第以後、冤罪とも言える處罰から二度の遷謫を受け、その生涯のほとんどを地方官吏として過ごした。ここでは、劉長卿の不遇とその超克が、どのように詩に反映しているかを見ていく。それはまた大曆期の詩人達の處世の一側面を示していると同時に、官にありながら隱逸の境地を見出し、不遇を超克した白居易に至る一過程でもある。

このことを解明するために、まず「隱吏」という詩語に着目した。身は官職にありながら、心は閒適にあることを表す言葉であるが用いられることは少ない。盛唐期・中唐期には、王維・杜甫・劉長卿・皎然らに一例ずつ見出される。劉長卿の詩では「隱吏」の語を用いずに「隱吏」としての生き方を表現する詩が多く見られる。これと似た語に「吏隱」があり、用例も多く「隱吏」と同義であるが、劉長卿にはその用例はない。

ここでは、まず、「隱吏」について、王維・杜甫・劉長卿の詩を見ていく。次に、劉長卿の詩に「隱吏」としての處世がどのように表れているかを考察し、最後にそれが白居易の「香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」

の「重題」其三へどのように繋がっていかを見たい。

### 二、隱吏

王維の詩は次のようなものである。

酬賀四贈葛巾之作 賀四の葛巾を贈るの作に酬ゆ

野巾傳惠好 野巾 惠好を傳へ

茲脫重兼金 茲に脱はりて 兼金より重し

嘉此幽棲物 此の幽棲の物を嘉し

能齊隱吏心 能く隱吏の心を齊ふ

早朝方暫挂 早に朝するに 方に暫らく掛け

晚沐復來簪 晚に沐するに 復た來りて簪す

坐覺羈塵遠 坐るに覺ゆ 羈塵の遠きを

思君共入林 君を思ひて 共に林に入らん

《全唐詩》卷一二六

この詩は葛巾を介して王維の隱棲を望む姿勢を描いているが、特に第五句、第六句で、官吏として出仕する間は脱して掛けておき、帰ってから身につければ本来望む隱棲に戻ることができるとうたう。出仕と隱棲を使い

市川清史

分けている点が特徴であり、所謂半官半隱の處世、つまり公的生活においては「官」、私的生活においては「隱」という使い分けを示す語として「隱吏」が使われている。

杜甫の詩は次のようなものである。

送裴二虬尉永嘉 裴二虬の永嘉に尉たるを送る

孤嶼亭何處 孤嶼 亭何れの處ぞ

天涯水氣中 天涯 水氣の中にあり

故人官就此 故人 官此に就き

絕境興誰同 絕境 興誰か同にせん

隱吏逢梅福 隱吏 梅福に逢ひ

遊山憶謝公 遊山 謝公を憶ふ

扁舟吾已就 扁舟 吾已に就き

把釣待秋風 釣を把りて 秋風を待たん

『全唐詩』卷二四

『杜詩詳註』では天寶十三載（七五四）に近い頃の作ではないかとしている。裴虬の赴任先は永嘉という謝靈運ゆかりの地である。首聯も、その「登江中孤嶼」など、永嘉太守となった時期の作品を連想させるように作られている。また、『杜詩詳註』では、第四句の「絕境」について、陶潛「桃花源記序」を引いている。第六句の「謝公」については、謝靈運には「登永嘉緑嶂山」「遊嶺門山」などがあり、「遊山」という語からも、謝靈運が連想される。謝靈運の優遊と裴虬の赴任を重ね合わせ、裴虬のその地での過ごし方を「隱吏」と表現し、本来ならば忌むべき地方官赴任を江南の自然を楽しむ、羨むべきものとして描いている。裴虬に関する杜甫の詩は他に五首残されている。

劉長卿の隱吏の詩に触れる前に、劉長卿と裴虬との関係を示す詩を見ておく。劉長卿が裴虬の別墅を訪ね、不在であったことを嘆く詩である。

春過裴虬郊園時裴不在因以寄之

春裴虬の郊園に過る時に裴在らず

因りて以て之に寄す

郊原春欲暮 郊原 春暮れんと欲し

桃杏落紛紛 桃杏 落ちて紛紛たり

何處隨芳草 何れの處か 芳草に隨ひ

留家寄白雲 家を留めて 白雲に寄する

聽鶯情念友 鶯を聽きて 情友を念ひ

看竹恨無君 竹を看て 君無きを恨む

長嘯高臺上 長嘯す 高臺の上

南風冀爾聞 南風 爾の聞くを冀ふ

『全唐詩』卷一四八

右の詩の内容から、劉長卿と裴虬が舊知の間柄であったこと、しかも「白雲に寄す」という表現があることから、隱棲の志を同じくする間柄であったと思われる。

「隱吏」の語が使われた劉長卿の詩が次のものである。

送荀八過山陰舊縣兼寄剡中諸官

荀八の山陰の舊縣に過るを送り兼ねて剡中の諸官に寄す

ねて剡中の諸官に寄す

訪舊山陰縣 舊を山陰縣に訪ね

扁舟到海涯 扁舟 海の涯に到る

故林嗟滿歲 故林 滿歲を嗟き

春草憶佳期 春草 佳期を憶ふ

晚景千峯亂 晚景 千峯亂れ

晴江一鳥遲 晴江 一鳥遅し

桂香留客處 桂は香る 客を留むる處

楓暗泊舟時 楓は暗し 舟を泊する時

舊石曹娥篆 舊石 曹娥の篆

空山夏禹祠 空山 夏禹の祠

剡溪多隱吏 剡溪 隱吏多し

君去道相思 君去きて 道に相思はん

〔《全唐詩》卷一四九〕

荀八なる人物が越州山陰の舊職に立ち寄る旅の出発を見送り、兼ねて剡溪に地方官として赴任している知人たちに贈った詩である。山陰といい、その近くの剡溪といい、六朝時代から唐代にかけて著名人たちが居住して様々なエピソードの伝わる江南の名跡である。名跡ではあるが、都長安からは遠く、この詩では「海涯」と表現されている。これは杜甫の詩が永嘉を「天涯水氣中」と表現したのと共通している。

詩には、荀八が山陰を再訪し、任期が終わってしまったことを嘆いていること、在職期間を思い出さうことや、その地の風景の美しさや舊跡などがうたわれているが、最後の聯では、剡溪には隱吏が多く住み、荀八は道中、舊交に思いをいたさだろうと結んでいる。

当時、会稽山陰の地にも縣尉や主簿などの地方官吏として赴任していた士人が多くいた。その低い地位に甘んじながら、美しい江南の自然の中で官吏生活を送る人々を、劉長卿は「隱吏」と表現した。本来、厭うべき外任の卑官を、六朝以来の歴史に彩られ、幾多の自然詩人が詩に詠んだ江南の地にあることによって、逆に閒適を楽しむことができる「隱吏」と表現

したのである。

王維の詩での「隱吏」は、対となる「幽棲」が「幽（しづ）かに棲む」という修飾・被修飾の関係になっているので、構造としては「隱るる吏」というように見ることができる。一方、杜甫詩の「隱吏」は、対となる「遊山」が「山に遊ぶ」となっているので、「吏に隱る」と、動詞・補語の構造ととることができる。両者とも熟した形では使われていないとみることができる。これに対し劉長卿では、「隱吏」が対となる語がない形で用いられており、また、「剡中の諸官」全体を指す語として使われている。

「隱」と「吏」に分解するよりも、一つの熟した語として用いられているように思われる。ほぼ同時代の皎然に「東林期隱吏、日月爲虛盈（東林にて隱吏と期するも、日月虛盈を爲す）」（春夜期裴都曹濟集心上人院不至（春夜裴都曹濟と期し心上人の院に集ふも至らず））とあるが、ここで使われる「隱吏」もそのように理解することができる。

先に述べたように、「隱吏」に類似した詩語に「吏隱」がある。用例も多い。赤井益久氏は「中唐における『吏隱』について」〔《中唐詩壇の研究》創文社二〇〇四年一〇月五日〕で、大曆期には『吏を隱と爲す』考えが新たに付加されたことが指摘でき、「この場合の『隱』とは隱者としての拠り所を確保できたことがまず第一であった」と述べている。「隱吏」とは「吏を隱と爲す」態度をもって世に處した官吏と解することができる。

劉長卿には次のような詩がある。杭州に赴任する人を見送り、その低い官位であることを慰めるものである。

送陶十赴杭州攝掾 陶十の杭州に赴き掾を攝するを送る

莫歎江城一掾卑 歎く莫かれ 江城 一掾卑なるを

滄洲未是阻心期 滄洲 未だ是れ 心に期するを阻まず

浙中山色千萬狀 浙中の山色 千萬の狀

門外潮聲朝暮時 門外の潮聲 朝暮の時 『全唐詩』卷一五〇

新たに赴任する川邊の町の屬官の身分が低いなどと嘆くことはない、心に期するもの、つまり隱棲への思いを阻むものではないのだから。浙江の山々の様々な表情や朝な夕な潮の音、すべてが望みに叶ったものではないかとうたっている。隱吏の語は使っていないものの、詩に描かれている陶十が過ぐすであろう杭州での地方官生活は「隱吏」そのものである。

また、劉長卿と親しかった嚴維が出身地越州近くの諸暨縣尉に赴任する際の次のような詩がある。この時、劉長卿からは「送嚴維尉諸暨（嚴維の諸暨に尉たるを送る）」（『全唐詩』卷一四八）が贈られている。

留別鄒紹劉長卿 鄒紹劉長卿に留別す

中年從一尉 中年 一尉に従ひ

自笑此身非 自ら笑ふ 此の身の非なるを

道在甘微祿 道在りて 微祿に甘んじ

時難恥息機 時難くして 機を息むを恥づ

晨趨本郡府 晨は趨る 本郡の府

晝掩故山扉 晝は掩ふ 故山の扉

待見干戈畢 見を待ち 干戈畢はるも

何妨更採薇 何ぞ妨げん 更に薇を採るを 『全唐詩』卷二六三

「晨に本郡の府に趨り、晝に故山の扉を掩ふ」とあるのは、王維の「酬賀四贈葛巾之作」に「早に朝するに方に暫らく掛け、晩に沐するに復た來

りて簪す」とあるのに極めて類似した表現である。一方、「微祿に甘んず」と述べながら、「更に薇を採る」と言うのは地方官の職にあることがそのまま隱者的姿勢をとっていることを示していると思われる。

劉長卿には「隱吏」の用例は一つしかない。しかし、「隱吏」という言葉を使わずとも、「隱吏」が意味する地方官吏としての處世や生活態度を表現している。以下、これらを見ていきたい。

### 三、劉長卿の左謫と隱吏的處世

劉長卿の詩作に大きな影響を与えた重大な事件がある。二度の遷謫である。『中興閒氣集』の劉長卿小伝に「長卿有吏幹、剛而犯上、兩度遷謫、皆自取焉。（長卿吏幹有り、剛にして上を犯す、兩度の遷謫は、皆自ら焉を取る。）」（卷下）とあり、劉長卿の剛直な性格が上司との妥協を良しとせず罪を得たことがわかる。

『新唐書』藝文志には「：鄂岳觀察使吳仲儒誣奏、貶潘州南巴尉。會有爲辨之者、除睦州司馬、終隨州刺史（：鄂岳觀察使吳仲儒誣奏し、潘州南巴の尉に貶せらる。會またま爲に之を辨ずる者有り、睦州司馬に除せられ、隨州刺史に終る。）」とあり、遷謫は吳仲儒の誣奏による一回だけのように書かれていて、『中興閒氣集』の記述と合わない。

儲仲君『劉長卿詩編年箋注』（中華書局 一九九六年七月）は、劉長卿の遷謫の第一回目は至德三載（七五八）、吳仲儒の誣奏は二回目で大曆九年（七七四）、潘州南巴尉への左謫は一回目、睦州司馬への左謫は二回目のこととする。ここでは『劉長卿詩編年箋注』の見方に従う。

最初は長洲縣尉在職中に罪を得、下獄を伴うものであった。その衝撃は獄中で作られた詩が五首あることから察せられる。そして、劉長卿自身

が「生涯已逐滄浪去、冤氣初逢渙汗収（生涯已に滄浪を逐ひて去き、冤氣初めて渙汗に逢ひて収まる）」（「初聞貶謫續喜量移登干越亭贈鄭校書（初め貶謫を聞き續きて量移を喜び干越亭に登りて鄭校書に贈る）」（『全唐詩』卷一五一）と述べているように冤罪であったと思われる。

二回目では、轉運使判官・鄂岳轉運留後となっていた劉長卿が呉仲儒の誣奏を受け、睦州司馬に左遷されることとなる。小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』（大修館書店 一九七五年）の劉長卿傳（『唐才子傳』）の注五では、『舊唐書』卷七六「陳少游傳」の記述から、「郭子儀の娘婿である呉仲儒が、権力をかさにきて官物を着服しようとするのを、劉長卿が阻止したため、誣告されたことが分かる」としている。劉長卿の詩にも「地遠心難達、天高謗易成（地遠く心達し難く、天高く謗り成り易し）」（「按覆後歸睦州贈苗侍御（按覆の後睦州に歸りて苗侍御に贈る）」（『全唐詩』卷一四九）と朝廷に事の真実が伝わらないもどかしさが述べられている。

初期のころから歸隱への傾斜が見られることは赤井氏が「劉長卿試論―長洲縣尉時の左謫を中心に―」（前掲書所収）で指摘しているが、遷謫によりこの傾向は一層強まっていた。

會赦後酬主簿所問 赦に會ひし後主簿の問ふ所に酬ゆ

江南海北長相憶 江南 海北 長に相憶ひ

淺水深山獨掩扉 淺水 深山 獨り扉を掩ふ

重見太平身已老 重ねて見る 太平に 身の已に老ゆるを

桃源久住不能歸 桃源 久しく住みて 歸る能はず 【『全唐詩』卷一五〇】

至徳三載（七五八）二月、東京（洛陽）を回復し、乾元に改元され、大赦が行われた。これにより出獄した後の作である。ここでは太平の世に置

いたわが身は不要であり、桃源に長く住みすぎたために俗世に歸ることもできないというたう。出獄後なので「桃源に久しく住む」とは象徴的表現だと思われる。

大赦の後、劉長卿は南巴縣尉に左遷されることとなった。南巴縣は現在の広東省電白縣の東にあった。当時の意識でも僻遠の地である。

「初貶南巴至鄱陽題李嘉祐江亭（初めて南巴に貶せられ鄱陽に至りて李嘉祐の江亭に題す）」（『全唐詩』卷一四九）では「地遠明君棄、天高酷吏欺（地遠く明君に棄てられ、天高く酷吏に欺かる）」と不遇を嘆いた後、「清山獨往路、芳草未歸時（清山獨往の路、芳草未だ歸らざる時）」という隱棲を志向する句が続く。また「卻赴南巴留別蘇臺知己（卻て南巴に赴き蘇臺の知己に留別す）」（『全唐詩』卷一四七）では、「已料生涯事、唯應把釣竿（已に料る生涯の事、唯だ應に釣竿を把るべし）」と、自分の生涯はもはやこれまで、あとは釣竿を手にして隱棲するべきだろうというたう。

また、「松江獨宿」（『全唐詩』卷一四八）では、その頸聯で「一官成白首、萬里寄滄洲（一官白首と成り、萬里滄洲に寄す）」と、官にありながら萬里の彼方、滄洲に身を寄せるというたう。そして尾聯では「久被浮名繫、能無愧海鷗（久しく浮名に繫がるも、能く海鷗に愧ずること無し）」と、長らく俗世のしがらみにとらわれていたが、海鷗に恥ずることはないという。海鷗は『列子』を典故とすることは言うまでもない。つまり、官にありながら隱棲の志は守ってきたということである。これは、劉長卿自身が隱吏としての意識を持っていたことを意味している。

次の詩は隱吏としての地方官の暮らしぶりを詠んだ典型的な詩の一つと思われるものである。



留題李明府雪溪水堂 李明府の雪溪の水堂に留題す

- ① 寥寥此堂上 寥寥たり 此の堂上  
 ② 幽意復誰論 幽意 復た誰か論ぜん  
 ③ 落日無王事 落日 王事無く  
 ④ 青山在縣門 青山 縣門に在り  
 ⑤ 雲峰向高枕 雲峰 高枕に向ひ  
 ⑥ 漁釣入前軒 漁釣 前軒に入る  
 ⑦ 晚竹疏簾影 晚竹 疏簾の影  
 ⑧ 春苔雙履痕 春苔 雙履の痕  
 ⑨ 荷香隨坐臥 荷香 坐臥に隨ひ  
 ⑩ 湖色映晨昏 湖色 晨昏に映ず  
 ⑪ 虛牖閒生白 虛牖 閒にして白を生じ  
 ⑫ 鳴琴靜對言 鳴琴 靜かにして言に對す  
 ⑬ 暮禽飛上下 暮禽 上下に飛び  
 ⑭ 春水帶清暉 春水 清暉を帶ぶ  
 ⑮ 遠岸誰家柳 遠岸 誰が家の柳ぞ  
 ⑯ 孤煙何處村 孤煙 何れの處の村なる  
 ⑰ 謫居投瘴癘 謫居 瘴癘に投じ  
 ⑱ 離思過湘沅 離思 湘沅を過ぐ  
 ⑲ 從此扁舟去 此れより 扁舟去り  
 ⑳ 誰堪江浦猿 誰か堪えん 江浦の猿

『全唐詩』卷一四九

この詩は烏程縣の雪溪の水辺にある李明府（縣令）の居所で、別れる際に作られたものである。詩中「縣門」の語があるので、この水堂は官舎で

あるかもしれない。儲仲君『劉長卿詩編年箋注』では、左遷先の南巴に赴く途次、湖州に立ち寄った時の作とする。

注目すべきは、第三・四句である。「王事」は朝廷の仕事のことであり、日が傾くとともに、公務から解放され、県の役所の門からは青山が見えるとうたう。「青山」は劉長卿がよく用いる語で、やはり閒適隱棲を象徴するものであり、ここに縣令である李明府の隱吏としての生活の在り方をはつきりと示している。第五句から第十六句までが、閒適の場としての水堂からの風景が述べられる。雲峰、漁釣、晚竹、春苔、荷香、湖色などがうたわれるが、これらは隱吏の生活を彩るものである。

第十一句「虛牖閒にして白を生じ」は莊子「虛室生白、吉祥止止」に基づき、陶潜の「戸庭無塵雜、虛室有餘閒」（「歸園田居」其二）に通ずる。

第十三句の「暮禽上下に飛ぶ」も「飛鳥相與歸」（陶潜「飲酒」其五）に基づき、第十四句「春水清暉を帶ぶ」は謝靈運「石壁精舍還湖中作」の第二・三句「山水含清暉。清暉能娛人」からきていると思われる。「石壁精舍還湖中作」は夕暮れ時の日の光の変化を詠んだもので、劉長卿のこの詩の間帯も夕暮れ時である。また、第十五・十六句「遠岸誰が家の柳ぞ、孤煙何れの處の村なる」は明らかに「曖曖遠人村、依依墟里煙」（陶潜「歸園田居」其二）に拠っている。

第十七句から第二十句までが、別れにあたっての劉長卿の感懷となっている。

劉長卿は他にもこの詩のように地方官となっている友人知人を隱吏として描くものが多く見られる。「歸弋陽山居留別盧邵二侍御（弋陽の山居に歸り盧邵二侍御に留別す）」（『全唐詩』卷一四八）の後半を挙げる。

偶俗機偏少 俗に偶はするも 機は偏へに少く

安閒性所便 閒に安んずるは 性の便とする所なり

祇應君少慣 祇應 君慣ること少なく

又欲寄林泉 又た林泉に寄せんと欲す

世俗に迎合しても野心はなく、閒適は心になうことである。あなた方は公務に慣れることもなく、隱棲閒居への思いを強くしているとうたう。これは盧邵二侍御に向けたものであるが、劉長卿自身の思いでもあった。

「安閒性所便」については、劉長卿には他にも「不解謝公意、翻令靜者便（解せず謝公の意、翻て靜者をして便ならしむ）」（臥病喜田九見寄（病に臥せ田九の寄せらるるを喜ぶ））（『全唐詩』卷一四八）という表現があるが、これらは謝靈運「過始寧墅」の「拙疾相倚薄、還得靜者便（拙疾相倚薄し、還た靜者の便を得たり）」に基づいている。

他の例も舉げてみる。

故人滄洲吏 故人 滄洲の吏

深與世情薄 深く世情と薄し

解印二十年 印を解くこと 二十年

委身在丘壑 身を委ねて 丘壑に在り

買田楚山下 田を楚山の下に買ひ

妻子自耕鑿 妻子 自ら耕鑿す

〔題王少府堯山隱處簡陸鄱陽（王少府の堯山の隱處に題し陸鄱陽に簡す）〕

〔『全唐詩』卷一四九〕

唯有郡齋窗裏岫 唯だ有り郡齋窗裏の岫

朝朝空對謝玄暉 朝朝 空しく謝玄暉に對す

〔送柳使君赴袁州（柳使君の袁州に赴くを送る）〕

〔『全唐詩』卷一五一〕

勸耕滄海畔 耕を勸む 滄海の畔

聽訴白雲中 訴へを聽く 白雲の中

〔送齋郎中典括州（齋郎中の括州を典るを送る）〕

〔『全唐詩』卷一四七〕

郡簡容垂釣 郡簡にして 釣を垂るるを容れ

家貧學弄梭 家貧しくして 梭を弄するを學ぶ

〔對酒寄嚴維（酒に對して嚴維に寄す）〕

〔『全唐詩』卷一四七〕

白簡曾連拜 白簡 曾て連り拜し

滄洲每共思 滄洲 毎に共に思ふ

〔哭張員外繼（張員外繼を哭す）〕

〔『全唐詩』卷一四九〕

以上の隱吏的處世を示す詩は、地方に赴任した友人を訪問した折、或いは地方へ赴任する知人を送別した際に作られたものである。また、この地方とは長江中下流域の江南を中心とした地域である。地方官に赴く友人知人の赴任先での暮らしを隱吏のそれとして描写し、望ましいものとして、また、低い地位に甘んずる友人を慰める手段として描いている。

翻って劉長卿自身は隱吏としての在り方に納得していたかというところ、その心情は官途への未練を断ち切ったものではなく、現実の不遇に對して悲哀をにじませるものが多く見られる。その例として『唐詩選』にも採られ

ていて、よく知られる「重送裴郎中貶吉州（重ねて裴郎中の吉州に貶せらるるを送る）」（『全唐詩』卷一五〇）を挙げる。

猿啼客散暮江頭 猿啼き 客は散ず 暮江の頭  
人自傷心水自流 人自ら傷心し 水自ら流る  
同作逐臣君更遠 同に逐臣と作って 君更に遠し  
青山萬里一孤舟 青山 萬里 一孤舟

猿が啼く夕暮れ時、共に左謫の身の上であることがいやがうえにも悲しみを深くするとうたうが、裴郎中の乗る舟がたった一艘、どこまでも続く山並の中を遠ざかっていくという結句は、劉長卿自身の姿でもあっただろう。

しかし、一方で左謫の途次、江南の美しい風景に触れ、それが一時的なものではあっても、心の安定を得ているように思わせる詩句も見られる。

夕次擔石湖夢洛陽親故 夕に擔石湖に次り洛陽の親故を夢む

天涯望不盡 天涯 望め盡きず  
日暮愁獨去 日暮 愁ひ獨り去る  
萬里雲海空 萬里 雲海空しく  
孤帆向何處 孤帆 何れの處に向ふ  
寄身煙波裏 身を寄す 煙波の裏  
頗得湖山趣 頗る得たり 湖山の趣を  
江氣和楚雲 江氣 楚雲に和し  
秋聲亂楓樹 秋聲 楓樹を亂す  
……

『全唐詩』卷一四九

擔石湖は洪州にあり、餘干と豫章との間に位置する。初めに、天の果てまで眺めは尽きず、日暮れ時、愁いは消え去ったとうたう。どこまでも続く雲海のもと、たった一艘の舟の辿るあてどない旅路。その不安定な心理状態でも、美しい湖山の趣に心をゆだねている作者の姿がある。

長く続いた左謫の生活の中で、睦州司馬の在職期間は足掛け四年ほど続いている。劉長卿の生涯の中でも落ち着いた時期とみることができる。この時期に作られた詩の中で、特に不遇感を表に出さず、閒適の心境を表していると思われる詩を挙げる。『唐詩三百首』にも採られていて、比較的良好に知られた詩である。

孤舟相訪至天涯 孤舟 相訪ねて 天涯に至るも  
萬轉雲山路更賒 萬轉の雲山 路更に餘かなり  
欲掃柴門迎遠客 柴門を掃いて遠客を迎へんと欲すれば  
青苔黃葉滿貧家 青苔 黃葉 貧家に滿つ

「酬李穆見寄（李穆の寄せらるるに酬ゆ）」

『全唐詩』卷一五〇

この詩の前半二句は娘婿の李穆が贈った詩「處處雲山無盡時、桐廬南望轉參差、舟人莫道新安近、欲上潺湲行自遲（處處の雲山盡くる時無く、桐廬より南に望めば轉た參差たり、舟人道ふ莫れ新安近しと、潺湲を上らんと欲すれば行くこと自ら遅し）」（『寄妻父劉長卿』）（『全唐詩』卷二一五）を受けてのものであり、李穆が作者に逢うためには、天の果てのようなこの地にやっできて、更に雲山の中をうねうねと続く旅路を辿らなければならないという。こんなところまでよく来てくれたという気持ちもあるのだろうか、劉長卿の意識の中で、睦州は地の果てなのである。都へ戻れず僻遠の地ば



かりに赴任させられてきたという疎外感の現れとみることもできる。

しかし、後半では恨みごとや悲哀の感情は見られない。遠くからやってくる客を迎えようとして柴門、すなわち隱者の住まいの門を掃こうとする、青苔や黄葉した落ち葉がいっぱいであろうもないというたうが、これは王維「輞川集」の「宮槐陌」を意識したものであると思われる。

仄徑蔭宮槐 仄徑 宮槐に蔭はる

幽陰多緑苔 幽陰 緑苔多し

膺門但迎掃 膺門 但だ迎掃す

畏有山僧來 畏らくは山僧の來たる有らん

茱萸泝から欽湖の途中の小道的情景を詠んだものであるが、劉長卿の詩では、「宮槐陌」から「緑苔」「迎掃」という詩語を用い、場所を作者の住むいおりに、訪ねてくる人物を山僧ではなく娘婿に置き換えている。「黄葉」については裴迪の同題の詩の第四句に「落葉無人掃」とあり、劉長卿はこれも意識していると思われる。

輞川集は輞川莊での王維の隱逸世界を描いたものである。これを意識しているということは、劉長卿が睦州での生活を王維の輞川莊での隱逸生活に重ね合わせていることを意味している。この詩は睦州という都から遠く離れた地での隱吏としての安定した閒適の心境を描いたものととることができるのではないだろうか。

#### 四、潯陽左遷時の白居易への影響

劉長卿より後の時代に遷謫を得て隱吏としての生き方をとった詩人に白居易がいる。とりわけ、その潯陽左遷期の作品について劉長卿からの影響

があるのではないと思われる。ちなみに劉長卿には「送楊於陵歸宋汴州別業」(『全唐詩』卷一五二)があり、楊於陵は白居易の妻楊氏の同族である。

劉長卿に「送陸羽之茅山寄李延陵(陸羽の茅山に之くを送り李延陵に寄す)」(『全唐詩』卷一四八)という詩がある。『劉長卿詩編年箋注』によれば、廣德元年(七六三)の作で、第一回目の左謫の後の作である。

延陵衰草遍 延陵 衰草遍く

有路問茅山 路有り 茅山を問ふ

雞犬驅將去 雞犬 驅けて將に去らんとし

煙霞擬不還 煙霞 擬して還らず

新家彭澤縣 新家 彭澤縣

舊國穆陵關 舊國 穆陵關

處處逃名姓 處處 名姓を逃れ

無名亦是閒 無名も亦是れ閒なり

陸羽は『茶經』で知られ、官途に就かず隱者として生きた文人である。

劉長卿は他にも秦系、朱放などの隱者と親交があった。李延陵については、劉長卿に「送李摯赴延陵令」(『全唐詩』卷一四七)があり、「劉長卿詩編年箋注」も李延陵は李摯としている。「送李摯赴延陵令」には、「向水弹琴静、看山採菊遲(水に向ひて琴を弾ずること静かに、山を看て菊を採ること遲し)」とあり、赴任先の延陵における隱棲の様を詠み込んでいる。これは李摯も隱吏としての處世の態度をとっていたことを示している。

この詩では第一・三・五句の奇数句が李摯について述べ、第二・四・六句の偶数句が陸羽について述べている。李摯については、延陵の秋草の情景に触れ、淮南王劉安昇仙の故事を用いて李摯の隱棲の高い境地を述べ、

延陵縣に赴任したことを陶潜に喩えている。一方、陸羽については、茅山へ旅立つことやその霞たなびく景勝地に居することについて述べ、対句の關係で陸羽の出身地に近い穆陵關の地名を出している。

問題は尾聯である。「處處」は延陵の李摯、茅山の陸羽を指し、どちらも「名姓」から「逃る」という。「逃名姓」という表現は、梅福や韓康、法眞などの故事に基づくと考えられる。この中で梅福について見てみると、彼は王莽の篡奪後、妻子を捨て、九江に去り、仙人になったと伝えられる。その後、會稽で名姓を變じ、吳市の門卒となっていたところを目撃されたという（『漢書』卷六七）。この詩では、李摯・陸羽の生き方をこの梅福が名姓を変えたことになぞらえて「名姓を逃る」と表現している。世俗の名利を捨てているという点が、李摯・陸羽と梅福の共通点である。「逃名」という表現は李白にも「遠訪投沙人、因爲逃名客（遠く投沙の人を訪ひ、因りて逃名の客と爲る）」（宣州九日聞崔四侍御與宇文太守遊敬亭余時登響山不同此賞醉後寄崔侍御二首」其一）などとあるが、劉長卿の詩ではこの後に「無名も亦是れ閒なり」と続き、「名姓を逃れる」とことと閒適の境地とを結びつけている点が新しい。

この「名姓を逃れて閒適を楽しむ」という表現を後に白居易が使っている。よく知られた詩なので必要な部分のみ挙げる。

匡廬便是逃名地	匡廬は	便是ち是れ	名を逃がるるの地
司馬仍爲送老官	司馬は	仍ほ老いを送るの官たり	
心泰身寧是歸處	心泰く	身寧き	は是れ歸する處
故鄉何獨在長安	故郷	何ぞ獨り	長安に在るのみならん

「香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」重題其三

この詩では廬山の地を「名を逃がるる地」であり、「心身ともに安らぐ場所」としている。草堂を営んだ廬山の地こそ「名姓を逃れて閒適を楽しむ」のにふさわしい地であるということになる。これは明らかに劉長卿のこの詩を意識した表現である。劉長卿と同様の境遇に立ち至った白居易にとって、劉長卿が李摯をはじめとする地方官を閒適を楽しむ隱吏として描いたこと、劉長卿自身が左謫の身の上で隱吏としての生き方をとったことなどが、自分の生き方の先例として意識されることとなり、白居易のこの時の處生觀に影響を與えているのではないか。白居易も地方官に左遷されたことで隱吏としての生き方を選んだとみることができからである。

また、この聯では、閒適と老いがセットとなっているが、劉長卿の詩でもこの組み合わせはよく見られる。今までに見た詩では、

一官成白首	一官	白首と成り
萬里寄滄洲	萬里	滄洲に寄す

「松江獨宿」

寄身且喜滄洲近	身を寄するに	且らく喜ぶ	滄洲の近きを
顧影無如白髮何	影を顧るに	白髮を如何ともする無し	

「江州重別薛六柳八二員外（江州にて重ねて薛六柳八二員外に別る）」

《全唐詩》卷一五一

のような例が挙げられる。また、次のようなものがある。

書劍身同廢	書劍は	身と同一に廢し
煙霞吏共閒	煙霞は	吏と共に閒なり
豈能將白髮	豈に能く	白髮を將て

扶杖出人間 杖に扶りて 人間に出でん

「偶然作」

『全唐詩』卷一四七

士人としての希望は絶え、地方役人の私は美しい景色とともに閒適を楽しんでいる。年老いて杖に頼りながら俗世間に戻っていくことなどできようか、という内容である。題は「偶然の作」とあり、誰かへ向けて書かれたものではなく、作者自身の感慨を詠んだものであろう。儲仲君『劉長卿詩編年箋注』は、この内容から睦州司馬時代の作としている。引用した部分の最初の二句は、官途の望みが断たれ、隱吏として生きること述べる。後半二句は、今さら白髪の身で世に出ていこうなどとは思わないというたう。劉長卿の生年には諸説あるが、儲仲君にしたがえば睦州在任期間は五十二歳から五十五歳までのことで、当時としては老年である。劉長卿においては、老いと閒適への傾斜が一つの組み合わせとして表現される傾向があるように思われる。白居易の詩においても、このことが踏襲されている。また、劉長卿の左謫の最後の官は司馬であった。

このように見てくると劉長卿の影響を思わせる表現はもう一つある。この白詩のもっとも有名な詩句は頷聯であろう。

遺愛寺鐘欹枕聽 遺愛寺の鐘は 枕を欹てて聽き  
香爐峰雪撥簾看 香爐峰の雪は 簾を撥げて看る

この聯の後半、詩全体では第四句目は簾を上げて風景を眺めるという表現であるが、劉長卿の詩にも同様な表現が少なからず見られる。まず、それらを挙げる。

① 卷簾高樓上 簾を卷く 高樓の上

萬里看日落 萬里 日の落つるを見る

「雨中登沛縣樓贈表兄郭少府（雨中沛縣の樓に登り表兄郭少府に贈る）」

『全唐詩』卷一四九

② 蒙籠低冕過 蒙籠は 冕を低れて過ぎ

青翠捲簾看 青翠は 簾を捲きて看る

「同郭參謀詠崔僕射淮南節度使廳前竹（郭參謀と共に崔僕射の淮南節度使廳前の竹を詠ず）」

『全唐詩』卷一四九

③ 老農持鋤拜 老農は 鋤を持して拜し

時稼捲簾看 時稼は 簾を捲きて看る

「題蜀孤使君湖上林亭（蜀孤使君の湖上の林亭に題す）」

『全唐詩』卷一四八

④ 綠竹放侵行徑裏 綠竹 放へほしいままに侵す行徑の裏

青山常對卷簾時 青山 常に對す簾を卷く時

「赴南中題褚少府湖上亭子（南中に赴き褚少府の湖上の亭子に題す）」

『全唐詩』卷一五一

⑤ 春草雨中行徑沒 春草 雨中 行徑沒し

暮山江上捲簾愁 暮山 江上 簾を捲きて愁ふ

「漢陽獻李相公（漢陽にて李相公に獻す）」

『全唐詩』卷一五一

これらの詩句において簾を上げて見ているものが何であるのかを見たい。

①は儲仲君『劉長卿詩編年箋注』によれば、進士登第前の初期のもので、詩中には「故山今不見、此鳥那可託（故山今見えず、此の鳥那くにか託すべ

き」と漂白の身の上を嘆き、「小邑務常閒、吾兄宦何薄」と表兄の官界での不遇に同情しつつ、最後に「何當遂良願、歸臥青山郭（何れか當に良願を遂げ、青山の郭に歸臥せん）」と隱棲への願望を語る。赤井氏はこの最後の聯について、先の論文で「未來を予期できぬ境遇の打開を『歸隱』への希望を表明」しているとする。簾を上げて直接見ているのは落日の風景だが、それを通して不遇感の裏返しとしての歸隱へ連なる風景ではあるまいか。

②では、簾を捲いて見えるものは「青翠」である。青山の意で使われることも多いが、この詩は竹を詠じているので、青々とした竹を指しているであろう。崔僕射を悼む詩であるので、隱棲とは直接の関連はないが、晉の王徽之の故事への連想はあるかもしれない。

③は儲仲君『劉長卿詩編年箋注』によれば、常州刺史であった獨孤及の居所での作。鋤（すき）を抱えた老農夫が挨拶をする、その時々農事は簾を巻き上げて見るとうたう。陶潜に「相見無雜言、但道桑麻長（相見て雜言無く、但だ道ふ桑麻長びたりと）」（「歸園田居」其二）とあり、孟浩然に「開筵面場圃、把酒話桑麻（筵を開きて場圃に面し、酒を把りて桑麻を語る）」（「過故人莊」）とある。農事を語り合い、農作業を眺めることは、田園閒居の日常を描く手法の一つである。簾を上げて見ているのは閒適の風景である。

④は南に赴く途次、褚少府もとに立ち寄り、湖のほとりにある亭で作られた詩の頷聯である。緑の竹は道の中まで伸び放題、青山は簾を巻きあげるとき常に望むことができるとうたう。この詩の首聯には「種田東郭傍春陂、萬事無情把釣絲（田を東郭に種へたがや）して春陂に傍ひ、萬事に情無く釣絲を把る）」とあり、町の東に畑を耕し、俗世間のすべてにかかわる意思

なく釣り糸をとるとうたう。これは隱吏としての褚少府の生き方を描いたものである。とすれば簾を卷いて常目に目に入る青山の姿は閒適隱棲の象徴であると言える。

⑤は、春草に雨が降る中、川のほとりで夕暮れ時の山を簾を上げて愁いとともに見る、とうたう。首聯には「退身高臥楚城南、獨掩閒門漢水頭（身を退きて高臥すれば楚城幽なり、獨り閒門を掩ふ漢水の頭）」とあり、宰相を退いた李相公が漢陽で隱棲していることがわかる。したがって、簾を上げて見る風景も隱棲生活の一部である。ただ、尾聯には「早晩却還丞相印、十年空被白雲留（早晩却て還らん丞相の印、十年空しく白雲に留めらる）」とあり、李相公の退隱は本意ではないようで、それが愁いの理由である。

ここに挙げた例では、簾を上げて見る風景は、ほとんどが隱棲閒適の象徴である。五例のうち二例は山のすがたである。劉詩では度重なる左謫と漂泊にも似た旅暮らしの中で、常にわが身に寄り添うものは青山であった。劉詩における青山は三十六例あるが、その多くがそのような隱逸を象徴するものとしての用例である。先に挙げた「同に逐臣と作って君更に遠し、青山萬里一孤舟」（「重送裴郎中貶吉州」）もそうであるが、他にも次のようなものがある。

誰憐此別悲歎異 誰か憐れまん 此の別れ 悲歎異にするを

萬里青山送逐臣 萬里 青山 逐臣を送る

「將赴南巴至餘干別李十二（將に南巴に赴かんとし餘干に至り李十二に別る）」

《全唐詩》卷一五〇

憐君更去三千里 君を憐れむ 更に去ること 三千里なるを

落日青山江上看 落日 青山 江上に看る

「使還七里瀨上逢薛承規赴江西貶官（使ひして七里瀨上に還り薛承規の江西の貶官に赴くに逢ふ）」  
『全唐詩』卷一五〇

同官歲歲先辭滿 同官 歲歲 先に辭滿ち  
唯有青山伴老身 唯だ青山の老身に伴ふ有るのみ

「送王司馬秩滿西歸（王司馬の秩滿ちて西に歸るを送る）」

『全唐詩』卷一五〇

逐臣となった身の上を嘆き、青山に慰めを見出しているところは、劉詩が悲哀に彩られている点を別とすれば、廬山を眺める白詩と共通していると言ってよいのではないだろうか。

以上から、白居易が江州司馬に左遷されたときに作られた、この最もよく知られた作品は多分に劉長卿の影響を受けている可能性があると思われることができないだろうか。

## 五、結び

王維における隱吏は、公的な生活と私的な生活がはっきり分けられた中で、私的な生活における生き方を示したものであった。杜甫の詩になると隱逸的境地を求める地方官吏の處世態度を表現する語として使われた。劉長卿はその流れを受けて地方官吏となっていた知人友人に対する多くの贈答送別の詩の中で、彼らの處世の在り方を隱吏として表現した。また自らが二度の遷謫を経ることによって、自分も隱吏としての生き方を模索していったのだと思われる。白居易は劉長卿が辿った隱吏としての生き方を江州左遷時に継承発展させた側面もあると考えることはできないだろうか。とすれば、劉長卿は王維と白居易を繋ぐ場所に位置する詩人であるという

こともできよう。

ただ、劉長卿から白居易への流れは、直接的なものとしては「香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」一例を挙げただけである。さらに研究を続けていきたい。

（いちかわ きよし 日本語日本文学科）